１．研究領域名：火山噴火罹災地の文化・自然環境復元
２．研 究 期 間：平成 16 年度～平成 21 年度
３．領域代表者：青柳　正規（独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・館長）

４．領域代表者からの報告

（1）研究領域の目的及び意義

火山の噴火で埋没した都市、集落、建物、耕作地は、通常短時間の自然現象によって遺跡化し、噴火にともなう降下物や土石流によって密封された状態にあるため、埋没直前の状況を伝えるさまざまな情報が蓄積されている。時間の経緯とともに徐々に廃墟化したその他の遺跡と比べるなら、蓄積された情報の量と質には格段の差がある。この特殊性に注目して、文化系、理科系のさまざまな学問分野が、蓄積されている情報を採集・分析し、埋没直前の文化環境と自然環境を復元すると同時に、噴火後の文化・自然環境がどのように変化し、復旧したかを解明することが本研究の目的である。研究の対象地としては、南イタリアのヴェスヴィオ山、群馬県の浅間山と榛名山、鹿児島県の開聞岳の 3 地域を選択し、それぞれの地域の埋没直前の文化・自然環境を復元する。ヴェスヴィオ山に関しては北山麓のソンマ・ヴェスヴィアーナでローマ時代遺構の発掘調査を通じて研究を遂行している。浅間・榛名に関しては火山噴火に関する古文書からの調査研究を中心とし、開聞岳では地中探査を駆使した発掘調査を展開している。これらの調査研究に基づき、3 地域の復元されたそれぞれの文化・自然環境から共通する要素を抽出することによって文化・自然環境を復元するためのモデルをつくり、同時に罹災・復旧・罹災という動態モデルの構築も試み、将来の火山噴火罹災地の復旧にも活用できる研究を行う。

（2）研究の進展状況及び成果の概要

ヴェスヴィオ山北山麓のローマ時代建築遺構の発掘調査と資料調査は順調に進展している。当該遺跡は、79 年の噴火による埋没ではなく 472 年の噴火によることが明らかになった。このことは数百年にわたるその使用期間中に当該遺跡の機能が変わり、各時代の変化を反映していることが明らかとなった。また、遺跡自体の性格も、「宗教的色彩を帯びた建築物群」という可能性が高まりつつある。遺跡を埋めているのは泥流堆積物が中心であることから、火砕サージの分布・層序・定置機構などの解析に基づき泥流発生メカニズム解明の研究を行っている。またナポリ大学との共同研究により植生の復元も解明しつつある。

浅間・榛名山周辺の研究は、噴火当時の古文書に反映された火山噴火に関する歴史的認識の研究を中核とするため、歴史資料のデジタル化および画像・テキストデータの結合、さらには画像閲覧ソフトの開発の研究を行っており、データの蓄積が実現し、同ソフトを活用した各研究項目の研究成果の統合をおこなう。

開聞岳に関しては、敷領遺跡の発掘調査、同遺跡の地中探査調査を通じて収集した基礎データの分析から、当該遺跡は、主に水田などの生産遺構を中心とする遺跡であることが明らかになりつつある。また、周辺に展開する集落の特定や社会構造の復元などの研究調査過程で、開聞岳にきわめて近い位置にある慶固遺跡を発見した。この発見は開聞岳の噴火範囲を歴史的に再考察する重要な遺跡となる。

５．審査部会における所見

Ａ－（努力の余地がある）

本研究領域は、火山噴火罹災地において断続的に封印された文化・自然環境を、共時的研究手法を用いて復元することを目的として、文理融合的な研究を推進している。イタリア、日本の榛名・浅間山、開聞岳を選ぶことによって、罹災時の自然科学的な条件の相違が、噴火後の文化・自然環境の復元にどのような相違をもたらすのかをモデル化しようとする野心的試みと評価する。

これまでのところ、イタリアの罹災地における発掘作業、噴火時の文化・自然環境の復元についての調査・研究は順調に進行しており、新たな事実の発見など、特筆すべき成果も上げている。ただ、文理融合的な研究という点では、今一歩の工夫が求められる。また、日本の研究は、イタリアのそれに比べて研究の遅れが若干見られる。各班の研究を有機的に関係付けて、全体に統合していく方策については、いまだ改善の余地が残されている。